

グリム 童話賞

『(さんかく)』をテーマに、誰もが楽しんで読める童話を募集した「第7回グリム童話賞」。全国から集まった329編から、兵庫県のパネーム「まつつら のぶこ」(兵庫県)の「さんかく」さんの作品「さよなら三角、丸家族」が一般部大賞に選ばれました。また、中学生以下の部で、市内在住のパネーム「藤美凜護」さんの作品「僕達だけが知っている」が奨励賞を受賞しています。今回は、この2作品をご紹介します。

一般の部 大賞
「さよなら三角、丸家族」
まつつらののぶこ(兵庫県)

今日は嫌なことが三つあった。給食が、大嫌いなけんちん汁だった。仲良しの亮と、けんかをした。宿題を忘れて、居残りさせられた。

だから、学校から一人で帰る羽目になった。むしゃくしゃして、道端の石ころをけつたら、跳ね返って足に当たった。

「いたっー！」
おばあちゃん、いつも「十二ノト三度」って言うのに、四度じゃないかっー！

「ただいまあ」
キツチンの床に、ランドセルをどすんと落とす。領収書を見ながら、計算機を打って

いたお母さんが、「おかえり」としかめつ面を上げた。
「あれっ？ お母さん……」
「あ、あれっ！ どっ、どっしたの、敦」
ぼくとお母さんは、お互いの顔を指さして叫んだ。
お母さんの顔が三角だ。あごがとんがっついていて、額が底辺の二等辺三角形だ。
「敦、あんたの顔、三角だよっ！」
「ぼくの？ うそっ、お母さんがだよ」
ぼくたちは、だだーっと洗面所に走った。鏡を見る。ぼくの後ろにお母さんが……。二人とも、りっぱな三角顔！
「さえ子さーん。私のお財布しらない？ お掃除の時、またどこかにやったでしょ」
不機嫌なおばあちゃんの声が、二階から下りてきた。
「何よ、そこに居るなら返事くらいしなさい……あれ、二

人共どうなってるの」
口をあぐり開けているおばあちゃんの顔も、細長い二等辺三角形だった。

三角顔の三人は、黙ってリビングに座った。だっ、どっしたのか、どっしたらいいのか、誰も分からなかったから。

このままだったら、外に出られない。学校は休めるけど、遊びにも行けない。
お母さんだっ、買い物にも行けないだろう。スーパーに行けないってことは、冷蔵庫に食べるものが無くなるってことだ。ぼくたち一家、飢え死にしちゃうかも……。

覆面して出かける。でもかえってじろじろみられそう。マスクをかけ、マフラーであごをかかく。でも花粉症の季節じゃないし、マフラーをするほど寒くない。

そっ、買った物はお父さん

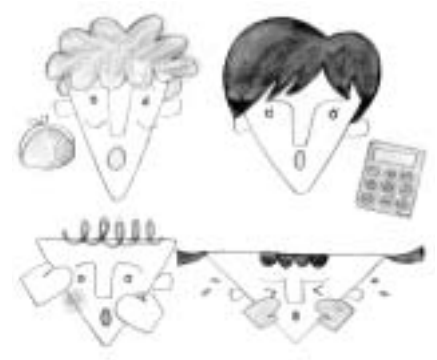
妹に頼むことにしよう。ぼくはそんなことを考えながら、黙りこくっているお母さんを見た。
「なんのインカで、こんなことになっちゃったんだろっ」
おばあちゃんが、ため息をつきながら言った。
「ただいまっ！」
塾から、妹の杏菜が帰ってきた。
「もう、塾キライっ！」
テストが悪かった時の杏菜の声だ。
「お兄ちゃん、五年生にもなって、何よ。塾の先生に、忘れ物名人って言われたよ」と、リビングのドアを開けるなり、ぼくが昨日塾に忘れてきたトレーナーを投げつけた。
「うえーっ……」
杏菜の顔も三角になっていた。それも九十度の二等辺三角定規形だ。両耳の上でくっつけた髪の毛が、ペナントにつけたフリンジみたいで、四十五度の角にぶら下がっている。

「な、なに、これ！」
杏菜が目をして突っ立っている。
「おまえだっ、三角顔だ」
「ええっ、うっそー」
鏡をのぞいた杏菜の目が、今度はまん丸くなった。
「お母さーん、どっしよう

ぼくたち家族は、なぜだか知らないけど、三角一家になっちゃった。
原因の分からないってことに、みんながいらつきだす。三角顔の中で、目がだんだんつり上がってきて、ケンアクムードがたまたまい始めた。

もう夕方だっ、言うのに、だれも電気をつけようともしない。
「ねえ、暗くなってきたよ。みんなお腹すかない？」
「敦、よくこんな時にお腹がすくわねっ」
お母さんが、とんがりあごの上の小さな口を突き出して言った。
「さえ子さん、あんた怒ってばかりいるから、そんな顔になったのよ」
「何ですって！ そんな顔

ぼくたち家族は、なぜだか知らないけど、三角一家になっちゃった。
原因の分からないってことに、みんながいらつきだす。三角顔の中で、目がだんだんつり上がってきて、ケンアクムードがたまたまい始めた。



はみんなです。一緒じゃあ
りませんか」

「やめてよ、もうっ」
杏菜が「うえーん」と泣き
出した。ぼくだって泣きたか
った。お腹もすいていたし。

「泣くなっ」
生意気で、憎らしいこと
を言う妹だけど、やっぱり三
角顔はかわいそう。三年生
になって、ルックスも気にす
るようになってるし……。

ぼくは、電燈のスイッチを
入れた。

泣いてる杏菜の顔が、くに
ゅとゆがんでいる。三角形
が引っくり返って、眉は八の
字、口はへ字。それがうま
くおさまっている。

かわいそうだけど、おかし
かった。で、思わず「ぶっ」
と笑ってしまった。

怖い顔でぼくをにらんだお
ばあちゃんが、杏菜の顔に氣
づいて「くっくっ」と笑った。
笑うぼくたちをジロリとに
らみつけたお母さんが、やっ
ぱり「ふふふっ」と笑いだし
た。

おばあちゃんの顔も、お母
さんの顔も、笑うたびにに
ゅとゆがんで、三角のとな
りが消えていく。

「あれ、ま、丸くなってい
く！」
ぼくは、あわててあごをさ

わって見た。とんがり、少
し丸くなっている。四人はい
つせいに、自分の顔をなでま
わした。

まるでお餅を丸めるような具
合に。

「ただいまあ」

お父さんが帰ってきた。

「どうした、玄関が真っ暗
じゃないか」

お母さんが急いで電燈をつ
ける。

「今日はお父さん頑張った
んだぞ。今月の営業成績がト
ップになったんだ。会社で一
番だぞ」

お父さんは、ちよつと得意
そうに胸を張っていた。

「お父さん、大変なんだよ。
みんな三角顔になっちゃった
んだよ」

杏菜が、泣き笑いでいった。
「はっ」

お父さんの顔が四角い！
しつかりした正方形だ。

「うん？ 三角顔って何だ。
みんな丸顔してるじゃないか。
うわっはっは」

四角顔のお父さんが笑った。
四角がくにゅと丸くなっ
た。

中学生以下の部 奨励賞
「僕達だけが知っている」
藤美 凜護（下野市）

ここは、竹内家二階の真理
ちゃん部屋。そして、僕は
ドールT 123。ジョンって呼
ばれている。

……七年前、僕はこの竹内家
にやって来た。一歳だった真
理ちゃんと一緒に遊んでから一
年で、心の形が出来たんだけ
ど、三年前、アブライトピアノ
の上に置かれた時に心の一部
を落としちゃったんだ……。

・形は三角
・きらきら光る。
・人間には見えない。
・無いと変な感じがする。

と、いう事だけだ。しかも、
僕達がしゃべれる事や心が在
ることはもちろん、動ける事
なんかは人間には絶対知られ
てはいけない秘密だから、出
掛けている間にしか探せない
んだ。だから、全然探せてな
いんだ。あーあ。でもね！
今日、絶好のチャンスがやつ
て来たんだ。そう、真理ちゃ
ん達がほっけーどー（北海道
の事の様だ）に三日間旅行へ
行くらしい。今度こそ見つけ
るぞ！

「それじゃあ、行って来る
から。ジョン、ラビィ、ナナ、
ジュン。みんな仲良くしてて
ね。花。みんなの事、よろし
くね」



「ワフンッ！」
行つてらっしゃーい
バタン

元氣よく出掛けて行く真理ち
ゃんを犬の花（メス）とぬい
ぐるみのラビィちゃん（うさ
ぎ）、人形のナナちゃん（魔女
っ娘キャラらしい）、ジュン君
（勇者キャラらしい）と共に見
送った。

「……良し行つたなっ」
僕は車の音が遠ざかるのを確
認して、立ち上がった。する
と、ジュン君が

「まだ探すのか？ 怪我し
ない様に気を付けなよ」
ジュン君は、ぶつきらぼうだ
が心配してくれるいい人だ。

「ありがとう。あ、ナナち
ゃん、いつもの。お願い
ナナちゃんはコクンと頷いた。
「風に乗って何処までも。
君なら出来るから……私を信

じて。恐れる事は無い。胸を
張って……三角は君の手に……」
「うわあああー！」

僕はナナちゃんの勇気の呪文
と共にアブライトピアノを
飛び降りたが、重力の為でや
っぱり少し恐かった。

ボフツ
「ふーありがとう花」
花の背に着地し、お礼を言う
と、花は嬉しそうに尻尾をパ
タパタしながら僕を床に下ろ
した。さて、今日はテーブ
ルの上から探そうと。

「よいしょ。よいしょ……
ふう。無いなあ」
テーブルの上から見た部屋は、
電気が消され光源は、窓から
入る光だけなので昼間にも関
わらず少し薄暗かった。部屋
じゅうの家具が僕よりも大き
い為か押し潰されそうで恐い
とも思った。しかし、今は三
角を探す事が先だと、首を振
り、気を引き締めテーブルか
ら降りるのだった。

「よし。次は……真理ちゃん
のベッドだ」
よいしょ、よいしょ……ふう。
はあ、はあ。よいしょ。はあ。
まだ着かない……。ふう。ふう。
「もう、疲れたあ」
ふらつとしたその時、
「パウッ！」
花が僕に吠えてくれたので、
ビックリして立ち直る事がで

て。恐れる事は無い。胸を
張って……三角は君の手に……」
「うわあああー！」

僕はナナちゃんの勇気の呪文
と共にアブライトピアノを
飛び降りたが、重力の為でや
っぱり少し恐かった。

きて倒れずにすんだ。

「いけない、いけない。あ
りがとう。さ、行こう花」

「ワッッ！」

ベッドに着いた時はもつす
でに朝だった。朝日に照らさ
れ、ベッドの下もなんとか見
える様だ。

「よつと」

パフツ

ベッドの上にダイブして探す
が、在るのはマクラとフトン
だけだ。

「しかたないっ」

ズルリツ

ベッドと壁の間を降りた。少
し暗くなったが、奥までしっ
かり見える。

カサツ

「へ？」

まっ、まさか……。奴なのか？
ゆっくり、振り返る。僕の目
が捕えたモノは、黒く光る体

…。長い触角……。鋭い爪……。

やつぱり…奴……。

キシヤー！と奴は恐ろしい
顔を向けて口を大きく開いた。
（様に見えるている）

「う、うわああああ〜」

僕は全力疾走でベッドの下か
ら飛び出した。

「ラ、ラビィ〜。助けてえ
ええ」

迫り来る黒い奴から逃げなが
ら泣き叫び、助けを呼んだ。

ポフツ、ガチャ、パンツラ
ビィはベッドから跳ねて窓を
開けた。その後、ウサキック
で奴をヒタリと止めた。

「お空の果てまで飛んでけ
ー！」

ラビィは持つていたにんじん
で奴を突き飛ばした。奴はお
うっ！と呻き声を出してお空
の星になった。

良く辺りを見回すと、どう
やら机の上だった。

「ここには在るかなあ」

花に助けてもらいながら、が
たがたと引出しの中を探った
が、見つからなかった。元通
りにして、机を降りて歩き出
した。

「えーっと、次は…ピヤ
ツ！」

僕は真理ちゃん鉛筆を踏ん
でしまい、顔面から着地して
なんとも間抜けな声を出して
しまった。いたいなあ。

「いたたた。あつ！こ
れは真理ちゃんの探していた
鉛筆だ。花。これテーブル
の上に置いてー」

「ワッッ」

花は頭が良くて本当に助かる。
さあ、次へ行こう。

結局、二日目はあの後たん
す、押し入れ、アップライト
ピアノ周辺を探したが、見つ
からなかった。今日の夕方五

時に真理ちゃんが帰って来る
から早く見つけなくては。そ
う思ってたが覚めたのは朝の
十時半だった。どうやら、本
棚の前で花と眠ってしまった
らしい。

「一、二、三、四、五、六。
六段と間があ」

普通の子供部屋の本棚より高
い高さを見て少し不安になっ
たが、刻一刻と時間が過ぎて
いるので、そんな事も言っ
られなかった。

本棚の裏を見て光る物は
何も無かった。

一段目に登った。本の題名
を見て、僕は漢字を少しし
か知らなかった。ちよつ
としか分からなかった。

「えっと、オズと……使
い？ 白雪？ ジャックと
…の木？ じゃなくて！ 三
角を探さなきゃ……。ここも
無しっ」と

本を出したりしたが無かった
のだった。

二段目にも登った。ここは
マンガと言う物が置いてある
段の様だった。しかし、やつ
ぱり三角は無かった。

三段、四段と登った所で、
時間が五時を回ってしまった。

「どうしよう…まだ見つか
らない。もうすぐ真理ちゃん
来ちゃっよう」

僕は不安と焦りで、せわしな

く本を出し入れした。

「もしも、外とかに出ちゃ
ってたらどうしよう。戻って
こなかったらどうしよう。ど
うしようー」

どうしよう。それだけが
頭にぐるぐる渦巻いて、涙の
代わりに、それと似た気持ち
が溢れて来た。これは△。台
形だ。不安と悲しみだったっ
け。

プロロロロロ

「やばい！真理ちゃんが帰
って来たっ！」

そう思った時、世界がグラリ
と傾いた。バランスを崩して
落ちたのだ。

ヒュー……。ポスッ
ダダダ

ドン。ドササササ

花は僕を助けようと走ったが、
タッチの差で間に合わず、本
棚に突っ込んだ。ぼくは本の
下敷きになったが、体の中は
綿なので大丈夫だった。しか
し、体の一部や、僕の一張羅
がポロポロだ。痛い。ズキズ
キする。これは×。パツだっ
たっけ。痛みと苦しみだった
気がする。本の間から頭を出
し、首をふるふる振るうと、
コッソ。頭に何かが当たった。
もしかして…。形、光りとも
に同じ。三角だっ！

「やったー！」

三角を手に取ると、すうっと

僕の体の中に溶け込んだ。

バタン

「たっだいまー。みんな仲
良くしてた？ っであれえ？
窓開いてるう？ これ、探し
てた鉛筆……。どうしてえ？
っであええ！ 花、ジョン、
大丈夫？ ああ、ジョンった
らこんなにポロポロになっ
ちゃって。猫でも来たのかなあ」

花はバタバタと尻尾を振った。
真理ちゃんは、花を一回撫で
てから僕を抱き上げた。

トクン。トクン。

胸が高かった。ようやく、三
角が心と体に馴染み、染み込
んだからだろう。って事は…
ああ、これが三角の気持ちな
んだ……。あつたかくて、とて
も落ち着く……。嬉しい様な、
ふわふわした、なつかしい気
持ち。もしかして、これが
幸せ。ってやつなんだろう
か。

真理ちゃん。優しい真理ち
ゃん。いつか、いつか秘密で
なくなる時が来たら、きつと
僕の口から言うよ。…あり
がとう。…ってね。…それ
までは、三角を探した事も、
この気持ちも、この七年間の
ことも…。僕達だけが知って
いる…。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。

トクン。トクン。